

家庭科の男女共修をすすめる会

№
12

発行日 51. 10. 20

<連絡先>

東京都渋谷区代々木2-21-11
婦連会館内

一部 50円

TEL 03 (370) 0238

十月七日の新聞で、教課審の「審議のまとめ」が発表されましたが、家庭科については予想通り、殆んど前進はありませんでした。けれども、高校の教科・科目の編成に関して次のように書かれていることは、共修の運動と無関係ではないと思われます。

◇ 女子における「家庭一般」及び普通科における「体育」と芸術の必修の取扱いについては、現行どおりとする。

勤務にかかわる体験的な学習については、生産や生活等にかかわる教育的な配慮をした実際の・体験的な諸活動を通して、仕事の楽

教課審「審議のまとめ」(教育課程の基準の改善について)発表される

- も く じ
- * 教課審「審議のまとめ」発表される.....(1)
 - * 「男女平等問題研究会」でも.....(3)
 - * 第13回「家庭科の男女共修をすすめる会」集会報告.....(4)
 - * 関西グループ、新潟「家庭科の男女共修を考える会」の集会から.....(6)
 - * シンポジウム「家庭科はいつまで女だけ？」報告.....(7)

- 出
- * 教課審 企画推進本部等に要望書を提出.....(10)
 - * 奥田審議官との面会から.....(12)
 - * 文部省各課 衆参議員諸氏を訪問.....(13)
 - * 文部省に再び署名を届ける.....(14)
 - * 家教連の集会から.....(14)
 - * 石川県でも.....(15)
 - * 日誌・メモ.....(16)

抗議集会のおしらせ

と き 11月6日(土)
PM1:30~4:30

ところ 婦連会館
渋谷区代々木2-21-11
電話 03(370)0238

参加費 200円(予定)

審議のまとめの内容について検討し、現状維持の方針に皆で強く抗議しましょう!

しさや完成の喜びなどを体得させるとともに、勤労観や職業観の育成にも資することを主なねらいとして、できる限りすべての生徒にその機会が与えられるよう拡充を図る必要がある。しかし、それを内容とする特定の教科を設けてすべての生徒に履修させることは、将来の課題として研究することとし、今回の改善においては学校の教育活動全体を通じてこの学習の趣旨を実現するよう、主として各教科以外の教育活動における計画の中での履修によることや職業に関する教科・科目のうちこの学習のねらいにふさわしい科目の選択履修によることが適当である。このため、職業に関する教科・科目の改善に際しては、この学習にふさわしい科目、例えば「技術一般」「園芸」「加工」「情報」のような科目を設けることなども研究する必要がある。

◇ ◇ ◇
家庭科の改善の基本方針は、次のように述べられていきます。

◇ ◇ ◇
小学校、中学校及び高等学校を通じて、実践的・体験的な学習を行う教科としての性格が一層明確になるように留意して内容の精選を行い、その構成を改善する。

その際、小学校においては、児童の衣食住などに関する実践的な学習を通してつくることや働くことの喜びを味わわせるとともに、家族の一員としての自覚や家庭生活に協力しようとする態度を養うこと、中学校においては、「男子向き」と「女子向き」の履修方法の関連を一層密接にするとともに、地域や学校の実態及び生徒の必要に応じて内容を弾力的に取り扱うようにすること、高等学校においては、家庭生活に必要な衣食住、保育などに関する知識と技術を、家庭生活を営営する立場から一層総合的に習得させることを、それぞれ重視する。

◇ ◇ ◇
中学での、改善の具体的事項に関する記述は、次のようです。

◇ ◇ ◇
(ア) 現行の領域区分は、男子向き、女子向き別や学年別になっているが、これらを一括して示すこととし、次のような新たな領域を構成する。

A 木材加工 B 金属加工 C 機械 D 電気
E 裁縫 F 被服 G 食物 H 住居 I 保育
— 小領域については略 —

(イ) (ア)に示した領域のうち、男子が履修す

るものとしては、木材加工、金属加工、機械、電気及び裁縫の中から、女子が履修するものとしては、被服、食物、住居及び保育の中から、それぞれ少なくとも4領域（又は小領域）程度を指定することとするが、指定以外の領域（又は小領域）については、男女相互の協力と理解を図るという観点並びに地域や学校の実態及び生徒の必要に応じて弾力的に取り扱うという観点から選択して履修させる。

◇ ◇ ◇
— 以下略 —
高校の、改善の具体的事項は次のよう、共修の問題への配慮はみられません。

◇ ◇ ◇
(ア) 家庭一般は、家庭に関する科目の基礎とし、その内容を構成するに当たっては、家庭生活に必要な衣食住、保育などに関する知識と技術を中核とし、家庭生活を総合的に理解させることができるようになる。

(イ) 内容については、家庭生活を営営する立場から各項目を有機的に関連づけて取り扱うことができるようにするため、現行の7項目（家族と家庭経営、家庭の生活時間と労力、家庭の経済生活、食生活の経営、衣生活の経営、住生活の経営及び乳幼児の保育）を、例

例えば「衣生活」、「食生活」、「住生活」、「保育」及び「家族と家庭経営」の5項目程度に整理統合する。

— 以下略 —

◇ ◇ ◇
こうした内容のものを、なぜ女子だけ必修にするのか、また中学でなぜ男女で別の領域を指定するのか、理由はあきらかにされていません。「家庭生活を営営するのは女だ」という考えに立っているのだとしたら、たいへん困ったことです。

発起人は、ただちに文部省に抗議に行き、教育課程担当の奥田審議官に次のような抗議文を手渡しました。

抗議文

◇ ◇ ◇
今度発表された「審議のまとめ」をみて、家庭科について殆んど前進がみられないことに、私たちは激しい怒りを感じます。

体験的学習の重視という考え方が示されたことは評価できますが、体験的学習を強化するための制度的保障はあきらかではありません。

更に、男女の役割を考えなおすための教育ということについて考慮されていないことが

重大です。

このまとめは、国内行動計画概要の「従来の男女の役割分担意識にとらわれない教育、訓練を推進する」という方針や、婦人問題企画推進会議の中間意見の「家庭科教育も家庭運営の責任が男女双方にあるという立場から検討されなければならない」という考え方に全く反するものです。

世界の動きにも逆行し、国内の世論を無視したこの差別的な方針に対し、私たちは断固抗議します。

一九七六年一〇月七日

家庭科の男女共修をすすめる会

文部大臣 永井道雄 殿
教育課程審議会会長 高村象平 殿

◇ ◇ ◇

十月中旬に一般からの意見がまとめられ、十月中旬に最終答申が出るということです。

更に最終答申に向けて運動をすすめますので、できる限りの協力をお願いします。（梶谷）

((男女平等問題研究会議でも……))

労相の私的諮問機関である「就業における男女平等問題研究会議」では、十月二日、職場での女子労働の実態と問題点を指摘した報告書を発表しましたが、その中でも家庭科の問題がとり上げられています。

「国公立の教育・訓練機関の行う教育訓練は、一般的には男女平等の原則に立って運営されているが、高校における女子の家庭科必修等男女で異なる取扱いがみられる」と、問題を指摘し、「男女が固定観念にとらわれず、その資質と能力を十分伸ばし、これを發揮して社会に貢献することが必要である。ことに、教育における社会通念の形成の重要性にかんがみ、教育の各段階で固定観念にとらわれない教育・進路指導が行われるべきである。」と述べています。

十一月初旬に発表される婦人問題企画推進会議の最終意見でも、家庭科改革の必要性が中間意見のときよりも更に強くうたわれるはず。

家庭科改革の必要性はますます広く認められつつあります。文部省が逆行する方針を出すことを許してはならないでしょう。（梶谷）

第13回 「家庭科の男女共修をすすめる会」 集 会 報 告

テーマ 「子供の発達と家庭教育」
日時 九月十八日(土) PM 1:30 ~ 4:30
講師 千葉大学教授 城丸章夫氏

△発達について▽

発達とは、先天的素質を重視するものと、後天的な学習を重視するところとがあります。学習は、個々の知能、認識、技能を身につける事と、全人格の変容を扱うものがあります。ここでは、全人格の変容にかかわるものにひきつけて理解したいと思っています。

今日の青少年の発達上のゆがみは、人格上の特質を問題に語られているからです。今日の青少年の特長の問題は、幼児性パーソナリティ(甘ったればうず、だらしない)を強く持つ点です。体のわががについていかず、実務的能力がないのです。

この甘え、エゴイズム―自分主義は家庭生活に問題があります。親子のなれあい、心情的結合が子供の一人立ちをさせず、これが技術的面にも及ぶわけです。

次に友達との交際能力が低下しています。

話し合ってみたいと思っても話せないのです。世間のルールを知らないし、「コンニチワ」のおじぎができない―ことで、話し合いの中に入れないのです。

△マイホーム主義▽

親子べったりの世界に閉じられている世界はどこから来たのでしょうか？

戦前の家族制度的考え方問題があります。戦前は、権力と結合した制度的なものとしての押しつけでした。戦後、天皇制の崩壊で、残るものは家族の愛情とマイホーム主義が組み立てられていったわけです。この型が問題です。

村の家族にも同じことがいえます。村制度への各家庭の抵抗↓秩序のくずれ↓親子べったりの家族主義。

マイホーム主義は外の社会への通路をどういう形で持っているのでしょうか？

会社には大いに開かれています。地域社会には閉じられています。

私は二〇年近く団地生活をしていますが、

近年その傾向が非常に強くなっています。

先日、団地(共同管理)にはいる植木屋に「あんた達は勝手なことを言う」としかられました。つまり、一本の木を切るにも、一階の人は、日蔭になるから上を切れ、二階の人は、目隠しになるから切るな。共同管理の団地にもかかわらず、棟の一致した考えがないのです。

家庭的世界そのまのやり方で外の社会を処理しようとするわけです。共同社会が一定の約束のもとに成立していることを知らないのです。契約関係があるのは会社だけです。

契約された社会を全然知らないわけですから当然契約が不当であっても、変更の仕方を知らないのです。だからトラブルが絶えない。

△家庭と発達のかかわり▽

子供の一人立ちとは？

世の中へ出ていく―契約された社会の中で生きることが可能となって始めて一人立ちできるわけです。契約された社会へ準備していくことは、学校であれ家庭であれ、子供の教育の中で重要なことです。

封建的な親類縁者との間にはまだ残っていますが、新しい市民、住民として見ず知らず

△文化▽

家庭内の仕事を有用性の一面だけでとらえてはいけません。

我々の生活全体の仕方を文化としてとらえなければならぬと思います(掃除の仕方―先輩から受け継いだ掃除文化)。地域の中でする仕事はそれぞれ文化運動なのです。

家庭内仕事を生活文化の問題としてとらえ直すのは、外の開かれた社会への通路を求めからです。文化の継承の第一次は家庭です。体から体へ伝えたものを基礎に国民の文化があり、社会の文化があるのです。

△開かれた社会の文化と家庭の文化▽

近年の問題点は、体に持った文化が否定され、外側から押しつけられた文化という点です。

若者に「生活の向上」を問うと、種々なるものを買う。お金を出して文化的なものを手に入れること」と回答します。自分の生活を自分の手で変えていくことを向上と考えていないのです。

消費者の要求を企業側に訴える社会は来ないのか、基本的国民の要求はどこでだれが育てるのか。家庭の仕事の中で我々が作り育て

の人との共同生活が訓練されていない現在の家庭は、子供の人格的発達に関し大きなゆがみを持っているわけです。では、健全な発達に對しどこで寄与するのでしょうか？

学校でも家庭でも、子供の発達を常に三つの機能①遊び②仕事③勉強でとらえるといえます。

*家庭の仕事

子供が大きくなり賢くなるということは何なのか？

幼児は遊びの世界から、面白い面白くないにかかわらず実際にやらなければならぬことが迫って来ます。明日の遊びのために今日、石ころを拾う―仕事です。同時に遊びの外側には、着物を着る、脱ぐなどという実際の仕事があるわけで、親も指導しなければなりません。それは、子供の世界に三つの機能をわけていく大きな力となります。

△家庭における子供の仕事はなにか？▽

子供が賢くなるための道すじとして考えると、親子のなれあい世界で、なれあいですまされぬものを生む―実務(仕事)―と思えます。仕事なしに遊びの世界から実際の厳格な世界をどうつかむのでしょうか。

家庭内の労働と言わず、仕事と申しますの

家庭集団の仕事が大切です。

あけていくものと思います。

△家庭が社会に開かれるとはどういうものなのか？

まず家庭の仕事は、国民の文化を体で伝えていく側面と、子供が自立していく力を育てるという側面を持つ点を子供の発達にかかわって第一におさえておきたい。

第二に、閉ざされていない家庭ならば、まず地域社会に開かれていなければならぬ。

それは地域の政治的経済的生活にかかわることと、家庭を現代社会に対応する最小集団Ⅱ細胞としてとらえることです。しかし、現在の政治的単位としての存在（家庭を越え、住民の共同性を指す）が一番欠けています。家庭を労働力再生産の場という面からだけでなく、政治的世界へ参加する細胞としてとらえて始めて家庭が通路を持つのです。ですから家庭科教育が都市問題や農村問題への通路を持たないことはおかしいと思います。

子供の発達の流れの中で、家庭だけに焦点をあてると、発達の力にかかわるものとして第一に、家庭内の仕事は人間の子供にとって必要なことです。戸外で仲間と遊ぶ自由が保障されるということと同じ重みを持っています。

す。

第二に、青年に何かが準備されなければならないならば、政治的、経済的の最少単位としての機能を果たす家庭がわかることです（家庭はセックスのみのつながりではない）。

従来の家庭科は、いかに賢明に家庭が世の中で働いていくかが問題とされましたが、これからは、そこに「家庭を出た賢明さ」を含んでいることを見通さなければなりません。

△文化創造の世界を我々の中にどう位置づけるか？

縫い方を教える先生が既制服を買うのはおかしい。なぜ子供に縫い方を教えるのか。学校は間尺に合うというだけで教えるはこまるのです。縫うⅡ文化遺産であることをおさえ、知恵をどういう風に作るのかを教えないければならないのです。

文化の継承、生活の中で基本として何を伝えるのかが問題とされます。又、集団の住民が本来の仕事、文化を担っているものであり、家庭だけではありません。これらをふまえて発展してもらいたいと思います。

(B・Y)

このあと、運動の現状について報告と討論を行い、現状維持に近い答申が出そうなので何とかそれを阻止するよう、できるだけのことをしようと話し合いました。

関西グループ、新潟「家庭科の男女共修を考える会」の集会から

昨春秋、「男女共修をすすめる会関西グループ」が発足、今年の一月十五日には結成総会が開かれています。以来署名集め、要望書提出、教課審関西出身委員への面会、定例会など、活発な活動をすすめています。同グループについては、ニュースでも何回かお知らせしてきましたが、九月十五日の集会に私も出席したので、会の様子を報告します。

大阪市立労働会館に、六三名参加。午前中は評論家三輪昌子氏の「スウェーデンの旅より帰って男女共修に思う」という講演。午後には半田が東京における最近の状況をお伝えしました。

出席者は、主婦、高校生、大学生、院生などを交え、小・中・高・大学の教師がほとん

シンポジウム「家庭科はいつまで女だけ？」

集會が開かれるまで

七月の初め、影山裕子氏から、家庭科教師達が新教育課程でも、「家庭科は女子のみ必修」を要望し、全国各地から署名が文部省に届いている。このままだと「女子のみ必修」が通ってしまいそうだという情報をいただいた。

(中嶋)

熱気につつまれた会場

前田武彦(TVタレント)・和田典子(戸山高校家庭科教諭)・吉武輝子(評論家)の三氏を講師に迎えて、シンポジウム「家庭科はいつまで女だけ？」が九月一日(土) 婦選会館に於いて開かれた。

大型台風一七号の接近でむし暑いうえ、定員一〇〇人の会場に一五〇人が詰めかけ、会場は熱気に包まれた。

主催は、あごら、新しい地平、女・エロス、おんなの叛逆、独身婦人連盟、家庭科の男女共修をすすめる会、国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会、日教組婦人部女子教育研究会、日本婦人会議、ホーキ星、

どで、熱心な質問や討議がありました。九月十一日の「家庭科はいつまで女だけ？」のシンポジウムで決議された要望書を支持、さらに各教組あて、男女共修の家庭科実現のための行動を、活動方針に掲げることを要請する要望書を決議し、意気盛んでした。

九月二十二日には、新潟市中央公民館で開かれた「家庭科の男女共修を考える会」に行ってきました。同会は県立短大講師の田代復子さん、音楽教師の石川七重さんの二人が発起人となって、今年四月発足、男女十人のメンバーが月一、二回ずつの集まりを持っています。参加者は三十人余りでしたが、教師・学生・保母・主婦など男性三人を交えて多彩でした。年休をとって二時間余り列車に乗ってきた保母さん、新聞の小さなお知らせ記事を見て赤ちゃんをおぶって参加した若いママさんなど、小人数のせいもありますが、参加者のほとんどが発言し、活発な討議が行われました。

どちらの会でも、家庭科の男女共修実現が、人間の生き方、女性のおかれた位置、学校・家庭教育の問題など、いま噴き出ている様々な問題状況の解決に大きなかわりを持つことが話し合われました。

(半田)

日本婦人有権者同盟、リブ新宿センターの二団体からなる実行委員会（当日までに間に合わなかったが、国際婦人年あいちの会、家庭科の男女共修をすすめる会関西グループから実行委参加の申し出があった）。

午後一時四〇分山下正子日本婦人会議議長の開会の挨拶で始まった。

「男女共修をすすめる会」がスタートしたのが一昨年一月。昨年は国際婦人年世界会議で性別分業論の見直しを柱とする世界行動計画の採択、全国組織の四一婦人団体共催の国際婦人年日本大会で家庭科の男女共修が決議されるなど共修実現に一步步近づくかに見えた。しかし最近になって共修は望ましいが実現はムリとみて男女選択になることを恐れた文部省・現場関係者等の「せめて女子のみ必修の現状維持」を守りたいというまき返しもあるという状況を含めて佐藤慶子氏から経過報告があった。

当日の講師の主張の主旨はつぎのとおり。前田武彦氏「私の男の子は最初、ボクたちに家庭科は必要ない」といっていた。しかし最近「アイツがいけないと生活して行けない」という弱味を背負うことは困るし、男の子は家のことなんかできなくてよいという考えは人間無視につながりかねないことを悟るよう

になった。本来家庭科とは人間として生活し、て行く上の知恵を授ける教であると思っいるから男子にも必要であって、それを女子のみに教育するのは封建時代の尾をひくもので問題がある。だから家庭科がベーバーストをするのはおかしいし、進学本位の学課の一つとなつてはならないし、生活技術の習得の場のみであつてはならない。男は仕事、女は家庭という考え方は、経済性のみを追求する人間性の介在しない歯車人間を多く作り出した。人間が幸せに生きるにはどうしたらよいか」という内容をぜひ男女共学んでほしい。

和田典子氏「家庭科の男女共修は混乱をまき起すと心配しているのは親と教師で生徒達には先入観なしに入行ける。家庭科の男女共修を阻むものは①女子の生理的特性に基づく特性論、②家事・育児は女が負ってほしいという社会的期待、③現実には家事・育児を女が負っているのが出来ないと男が困るからである。私は家庭科の男女共修は人間が人間として発達するための教育としてかせない領域であると主張してきた。それは①社会的自立能力を養うもの、②生命の生産と再生

産にかかわる営みの内容を正しく認識する、③全面発達の可能性を開発するものとして必要だからである。女生徒が「女で勝負する」といい始めると全面発達は防げられる。家庭科の男女共修は教育の民主化運動の一環として理解してもらう必要があることを提案したい。

吉武輝子氏「子供を育てている側の人間としてこの問題を考えてみたい。現実には職業人として優秀なら生活自立能力がゼロでも認められ、女は妻として母としての能力がまず評価されその次に職業人としての評価がつけ加わる。一見不合理のようだが、女はいろいろな場をふまえて生きることを要求されているため視点が広く、人間的な点とをみをしている。それにひきかえ職業人オシリ男はさまざまな視点をふまえた働きができないため、公害やロッキード事件を招いている。家庭科の男女共修は、女の地位向上というより男が人間らしく生きるスタートである。自立した人間同志でなければ、人生の軌道を自分で描くことも、軌道修正の自由もない。人間自立の場、人間性を回復する生き方が語れる場として男女ともに家庭科が根づいてほし

い。

つづいて参加者との意見交換に入った。

「男の子がこのままでは困る。女性解放は一般主婦はアレルギーでついて行けないといわれるが夫や子供など身近かな所から変えていこう。」（専業主婦）、「台風で食堂がしまつたらどうしようかと思う。女性解放運動は男性が自立する運動、男も生活の自立のために家庭科を必修にしてほしい」（大学生・男）、「家庭科は主婦の仕事の押し売りで、学校の中で最高につまらないのが家庭科」（女子高校生）、「学校中の教師の団結によって共修が実現した。みんな人間やろ」ということをわかってもらうのが家庭科」（大阪・家庭科教師）など活発なやりとりとなった。最後に要望書が全員の拍手で採択され、四時四〇分紀平悌子日本婦人有権者同盟会長の閉会の辞で散会となった。（文責・塚本）

採択された要望書は、左記の方々のところへ持参あるいは郵送しました。

三木首相 永井文相 文部省担当官
教育課程審議会委員 衆参両院文教委員
総理府婦人問題担当室 婦人問題企画推進本部参与 婦人問題企画推進会議委員

要 望 書

私たちは、中学校の技術・家庭科の男女二系列及び高等学校の家庭科の女子のみ必修を廃し、中学校・高等学校の家庭科を早急に男女共修とすることを要望します。

理 由

家庭責任は男女双方にあり、生活に必要な知識・技術は男女ともに身につけなければなりません。にもかかわらず、現行の女子のみの家庭科によって、「家庭のことは女だけがやればよい」という古い考え方が助長されています。そのために、男性の生活軽視の態度を招き、家庭での負担は女性にばかり集中し、男女の人間としての成長と、女性の社会への進出は著しく妨げられているのです。社会の進歩と女性の解放のために、このような状態は一日も早く改められなければなりません。

昨年七月、国際婦人年世界会議で採択された「世界行動計画」でも、男女の伝統的な役割を再検討すべきこと、家庭責任についての社会通念を改めるため、教育を通じてあらゆる努力が払われるべきことがうたわれ、その他多くの国際的な宣言、決議、計画にも同様の趣旨が盛り込まれています。わが国でも、

昨年十一月の国際婦人年日本大会で、家庭科の男女共修が決議されるなど「女子のみの家庭科は許せない」「家庭科は男女が学ぶべきだ」という声は高まりつつあります。

このような動きに逆行して、もし女子のみの家庭科が今後も続くならば、諸外国に対してまことに恥しいばかりでなく、教育の場に混乱をもたらすことにもなります。日本の教育に汚点を残すことのないよう十分な考慮をお願いいたします。

一九七六年九月十一日

シンポジウム

「家庭科はいつまで女だけ？」

参加者一同

シンポジウム

「家庭科はいつまで女だけ？」

共催団体

あごら・新しい地平・女エロス
おんなの疾逆・家庭科の男女共修をすすめる会・行動を起こす女たちの会・独身婦人連盟・日教組婦人部女子教育研究会・日本婦人会議・日本婦人有権者同盟
ホーギ星・リブ新宿センター・国際婦人年あいちの会・家庭科の男女共修をすすめる会関西グループ

教課審、企画推進本部等に
要望書を提出

これより先、共修をすすめる会単独でも、
八月末に要望書を作成、提出した。

教課審で検討中の新教育課程に、家庭科の
女子のみ必修が残りそうだと、というかなり確
実な情報を得てガク然。「もしや」「まさか」
と不安と期待の交錯の中で落ちつかなかった
この一年。その間も、教課審委員への働きか
け、集会その他、やるだけの手を打ってき
たのに……。早速、教課審、婦人問題企画推
進本部、企画推進会議へ再度要望書を出すこ
とになった。二年間の努力を無駄にしてなるも
のか、との意気込みだったが……

(駒野)

要望書の内容は次の通り。

要 望 書

私たちは、本年三月、貴審議会にむけて、
今、検討中の新教育課程に

- ① 中学校・高等学校の学習指導要領から、
「男子」「女子」の語句を削除すること
- ② 中学校の家庭科を男女共通必修にし、高
校の家庭科一般の女子のみ必修を廃し、男女
共通必修に改めること
- ③ 小学校五・六年における男女共学の家庭
科を確保すること

の要望書を提出いたしました。

なぜこのような要望をしたかという趣旨に
ついては、それに先立ち、個別に審議会委員
の先生方をお訪ねして、くわしく説明いた
しましたし、その要望書にも、「従来の家庭
科、特に中学校の男女別学の技術・家庭や
高校家庭一般の女子のみ必修が、昨年七月、
国際婦人年世界会議で採決された『世界行動
計画』の基本理念にいちじるしく反している
こと」「国際婦人年日本大会の決議でも、男
女共修の家庭科がうたわれていること」「現
行の制度が、男女の教育の機会均等をうたっ
た教育基本法の精神からはずれており、青少
年の全面発達にとって、マイナスと男女格差
を生みだしていること」「また、憲法の保障
する健康で文化的な生活（二五条）、家庭生
活における個人の尊厳と両性の平等（二四条）
の精神にそむくこと」などの理由をにかけて、

家庭科の男女共通必修の必要性について、先
生方の賢明なご考察をお願いいたしました。
よって、すでに貴審議会の先生方には、私た
ちの要望の趣旨は十分ご理解いただけたこと
と存じます。

しかし、その後、校長会、中学・高校の家
庭科の教員、教員養成大学の教員の方々から
「家庭科の男女共修はまだ実状にそぐわない」
「女子のみ必修の確保はぜひ必要」など、多
数の署名をそえてご要望があり、貴審議会や
文部省内部に、新教育課程に「家庭科の女子
のみ必修」を残していこうとするご意見が強
くなっている、と伝え聞いております。

このような方針が、新しい教育課程に盛り
こまれるようなことになっては、わが国の教
育は世界の潮流に逆行することにもなります
し、高まってきた「女子のみ必修の家庭科は
おかしい」という世論などや、現行の家庭科
に対する男女学生、生徒の不満はいっそう強
くなって、教育の成果に、重大な影響を与え
ることになると存じます。

教育は、未来の社会に対して責任をとらな
ければならない特殊な使命をもっているもの
であり、つねに時代の進んでいく方向を適確
に見定めて行われなければならないことは、

諸先生方こそ、いちばんよくご存知のはずで
ございます。

どうぞ、私たちの要望の趣旨を再度ご検討
のうえ、今後十年以上つゞく新教育課程の制
定にあたって、世界の流れに取り残される
「女子のみ必修」の制定を徹底し、「家庭科
の男女共通必修」という方向を明確に打ち出
してくださいますよう重ねて要望申しあげま
す。

昭和五十一年八月

東京都渋谷区代々木二の二十一の十一
婦人会館内 TEL(三七〇)〇二三八

「家庭科の男女共修をすすめる会」
発起人一同

教育課程審議会委員各位

要 望 書

私どもは、本年三月「家庭科の男女共通必
修をすすめる要望書」を提出いたしました
「家庭科の男女共修をすすめる会」のものと

でございます。

あの折、要望いたしました

- ① 中学・高校の学習指導要領から、男子
又は女子の語句を削除すること
- ② 中学・高校において、家庭科を男女共通
必修にすること
- ③ 小学校五・六年における男女共学の家庭
科を確保すること

について、現在審議中の国際婦人年国内行動
計画の本案に、ぜひとも成文化していただき
たく重ねてお願いいたします。

私たちの要望は、メキシコで採択された
「世界行動計画」の性別役割分業の意識の排
除という基本理念にのっとったものです。ま
た、生産の拡大ばかり追求した結果もたらさ
れた生活破壊の中で青少年が人間らしい生活
を守るための基礎教育を受ける権利がある、
との視点にたったものであることは、前回の
要望書でくわしく説明いたしました。

聞くところによれば、現在、教育課程審議
会ではいよいよ大詰め教科別審議にはいり、
家庭科の男女共修は時期尚早であるとして、
「女子のみ必修」維持のご意見も出ていろ
うでございます。

一三三カ国が参加した国際婦人年世界会議

において世界行動計画が採択された現在、
「女子のみの家庭科必修」などという古めか
しい教育課程をもつ国は少なくとも先進国で
は決してみられなくなるでしょう。このよう
な教育課程が、今後十年以上続いていくとな
れば、男女平等の実現のため性別役割分業を
改めていこうとする世界的な傾向に逆行する
ことになる、私たちは憂慮しております。

みなさま方も、世界行動計画の精神にのっ
とって、国内行動計画を検討していらっしゃる
のですから、私たちと同じ考えをおもちの
はずで。

私どもは、教課審の先生方にも、これまで
度々同じ趣旨の要望を申し上げてきましたし、
これからも要望しつゞけてまいるつもりでお
ります。

企画推進本部には文部省委員もおいでにな
ることですから、みなさま方のご意見をぜひ
とも教課審に反映させていただくために

国内行動計画本案には、ぜひ「家庭科の女
子のみ必修を排し、男女共通必修に」
と具体的に明記して、性別役割分業にもとづ
く女子のみ必修の方向が世界的に許されない、
ということを啓蒙していただきたいと存じま
す。

(12頁下段につづく)

奥田審議官との面会から

九月一日、参議院会館の市川房枝さんの部屋に文部省の奥田審議官を迎え、市川・梶谷佐藤・塚本・半田がお会いしました。文部省は、教育課程審議会に対して事務局という立場に相当するものですが、同審議官は、事務局長とでも称すべき中心的な存在です。そのため、早くから面会を申し込んでいたのですが、容易に実現せず、ようやくこの日、かねてよりの願いがかなえられたわけです。市川さんが「一生かけてやってきた婦人解放が逆もどりしている。その原因の最も大きなものに、家庭科女子必修がある。男は社会、女は家庭を教育で徹底させようというものだ。国内行動計画の概要に家庭科の男女共修を入れさせなかったのは文部省だと聞いているがどうか」と口を切りました。

奥田さんは「女性の解放は、戦後の男女共学が大きな推進力となっている。教育課程については、国が基準を作るが、編成の主体は学校にある」とテーマを述べたあと

「家庭科については、様々な意見が寄せられている。小学校の家庭科廃止という線も、

日教組・日教連から出たこともあった。中学

校の技術・家庭科は、教材が違うだけで、ねらいは全く同じである。高校については、女子にもさせる必要がない、男女共に選択でよい、男女共修にせよ、特性に応じて女子必修にせよ、などの意見がある。結論はまだ出ていない。十月初め、今までの審議の総まとめを発表、十二月最終答申となるだろう。

中学までは義務教育だが、高校は能力・適性に応ずる教育をするのがよいので、高校一年で基礎をみっちり学ばせたと、二・三年で能力・適性を伸ばせるよう、選択科目を何百種も用意した」と言います。

「能力・適性を伸ばすのが目的なら、男女には各々特性があるものという固定概念から女子に家庭科を必修とするのはおかしい。昨年の国際婦人年世界行動計画でも、男女の役割分担をとらえ直し、教育を通じて社会通念を変えるべきことが掲げられている。このことをどう受けとめておられるか」の問いに「それはメキシコの話でしょう。日本では日本のことを話しましょうや」と言われます。「日本大会でも41の婦人団体が一年間討議を重ね家庭科を男女共修とすべきことを決議している。これは世界の趨勢であるばかり、

(11頁より続く)

一九七六年八月

「家庭科の男女共修をすすめる会」

発起人一同

婦人問題企画推進本部委員各位
婦人問題企画推進本部企画室長殿
婦人問題企画推進本部参与各位
婦人問題企画推進会議委員各位

このような要望書を提出するとともに、教課審、文部省の方々と話し合いをすすめるようにしたのですが、時間の都合がなかなかつかず、お話できた方は少数でした。



が国内でも意識が高まっており、この時点で教課審が現状維持の答申を出すようなことがあれば、世界の物笑いの種子となるだろう」との意見には「男女の役割分担をとらえ直すのは、一家庭科などのこまかい所でなく、社会教育・家庭教育を含めた広いフィールドで検討すべきことだ」と答えます。

その他「男女共修の家庭科で何をやるかが問題だ。京都や、東京の文京高校でやっているのは座学で、やりやすいことをつまみ食いしているだけだ。あれは家庭科ではない」

「保育を女子に教えずにどうするつもりか。性の乱れをどうみるのか。(だからこそ男女共に教えないといけない、と言えよ)乳を飲ませることまで男に教えるとするのか。あなた方は古い。男女のおおのその特性を伸ばすことで平等なので、機械的に何もかも同じにせよ、というのは古い平等感だ」。

「男女共修などしたら、現場を混乱におとし入れる。でもかつて、突如として技術・家庭科を誕生させ、商業・農業・家庭科の教師にわか仕込みの工的分野を教えさせたではないか、と言えよ。技術・家庭科が悪いというのではないが、過去の反省から、あまり急に変えるべきではないと考えるのだ」という

ように、三時間近い面会でしたが、終始噛み合わせ話し合いに終わりました。

(半田)

文部省各課、衆参議員各氏を訪ねて

文部省を訪ねて

九月二日、三日には、教育課程審議会の中学・高校の分科会が開かれたので、それぞれ座長、高橋陸男さんと加藤陸奥雄さんに会場で要望書を手渡ししましたが、開会前の慌だし

い時で、殆んどお話はできませんでした。そのあと、文部省初等中等教育局の小、中、高校教育課にも要望書を届け、高等学校教育課長菱村幸彦さんにはお目にかかることができました。

菱村さんは、家庭科の担当は職業教育課だ

婦人問題企画推進本部の文部省の窓口は社会教育局婦人教育課だということなので、婦人教育課長の志熊教子さんをお訪ねしてみました。

志熊さんは、男女平等をすすめるための教育としては、学校教育よりも家庭教育が重要だと強調されます。家庭科を変えることよりおかあさんが態度を変えればよいとおっしゃるので、「どうすればおかあさんの態度を変えられますか」ときくと、「誰かそういう運動をやってくれませんかねえ」というお答えでした。

「『行動計画概要』に『家庭科』というところが入らなかったのは、文部省が反対なされたからだそうすね」とズバリ伺いますと、「一教科だけでなく教育全体の中で考えるべきことだから」というお答えはまあよいとして、「何も家庭科をイケニエにしなくても……」とおっしゃったのには考えさせられてしまいました。共修にして男女平等の扱いをするためには、家庭科の発展であって決してイケニエにすることではないのですから。

衆参議員諸氏を訪問

家庭科の問題をぜひ国会でもとり上げてい

文部省に再び署名を届ける

1 回
家
教
連
夏
季
集
會
報
告

八月一・二・三日、家庭科教育研究者連盟の年次大会が、秋田県田沢湖畔の「わらび座」を会場として開催されました。

大会テーマは、昨年につづいて

「家庭科の教育的意義をさぐる——人間と生活をとりもどす家庭科教育——」をかかげ、六月から参加をよびかけてきました。

折あしく、東北まつりシーズンの前夜と重なって、乗車券が手に入りにくく、中には七回も汽車をのりついでようやく辿りついたり、

また、会場になった「わらび座」は民族芸能の継承と発展を旨とする個性的な劇団として知られていますので、その集団生活を直接みたいというのにも参加動機の一つでした。

をあたえました。

[illegible]

最近活動が始まった石川県の婦人問題研究会（仮称）でも、家庭科の問題を第一にとり上げるようになりました。

理論だけでなく、行動をめざして、まず教科書の点検にとりかかるとのことです。

各地の運動についての情報を、事務局まで
 どんどんおしらせください。

宮崎県立高千穂高校商業科三年の実践（食

日誌・メモ

☆8・3	発起人会(駒野・塚本・中嶋・馬場・半田)	☆9・3	(落合・梶谷・和田) 9・11集会実行委員会(落合・梶谷・駒野・塚本・中嶋) 教育課程審議会高等学校分科会 加藤陸奥雄氏に要望書手渡し(梶谷・馬場)	☆9・21	文部省職業教育課へ署名と要望書を持参(佐藤・中嶋・樋口) 新潟「家庭科の男女共修を考える会」に参加(半田)
☆8・19	ニュース放送、発起人会(落合・梶谷・佐藤・塚本・馬場・半田)	☆9・25	婦人しんぶん「家庭科はやはり女だけ?」(梶谷)掲載される 毎日新聞の取材を受ける(梶谷)	☆9・27	「家庭科はいつまで女だけ?」実行委員会事後処理と今後についての話し合い(梶谷・中嶋)
☆8・22	9・11集会打合せ(梶谷・駒野・塚本・中嶋)	☆9・28	NET「家庭は誰のもの」ビデオどり(半田)	☆10・2	朝日、毎日、読売、サンケイ各紙の取材を受ける(樋口・和田)
☆8・25	9・11集会のはがき発送(梶谷・駒野・中嶋)	☆10・5	発起人会(青木・市川・梶谷・駒野・塚本・中嶋・馬場・半田・和田)	☆10・7	文部省奥田審議官に抗議文を手渡す(粕谷照美参議院議員も同行)(市川・落合・塚本・中嶋・半田)
☆8・28	9・11集会実行委員会(梶谷・駒野・塚本・中嶋)	☆9・10	教育課程審議会寺元芳子氏と電話で話し合い(中嶋)	☆10・9	発起人会(梶谷・塚本・中嶋・馬場・半田・和田)
☆8・30	全P研全国大会でアピール(梶谷)参議院議員粕原ヤス氏訪問(梶谷・中嶋)	☆9・11	シンポジウム「家庭科はいつまで女だけ?」に参加(市川・落合・梶谷・駒野・佐藤・塚本・中嶋・馬場・半田・和田)	☆10・9	参議院議員山中郁子氏訪問(梶谷・塚本・和田)
☆8・31	衆議院議員田中美智子氏、山原健二郎氏、参議院議員粕谷照美氏訪問(梶谷・塚本・半田)	☆9・15	関西グループの集会に参加(半田)	☆10・9	参議院議員山中郁子氏訪問(梶谷・塚本・和田)
☆9・1	文部省初等中等教育局奥田真丈審議官と会見(市川・梶谷・塚本・半田)	☆9・16	報知新聞の取材を受ける(梶谷)	☆10・9	参議院議員山中郁子氏訪問(梶谷・塚本・和田)
☆9・2	教育課程審議会中学校分科会高橋陸男氏に要望書手渡し(梶谷)	☆9・18	発起人会(落合・梶谷・佐藤・嶋田・中嶋・半田・和田)	☆10・9	参議院議員山中郁子氏訪問(梶谷・塚本・和田)
	文部省高等学校教育課長菱村幸彦氏、婦人教育課長志熊敦子氏訪問	☆9・20	参議院議員宮之原貞光氏、粕谷照美氏訪問(梶谷・和田)	☆10・9	参議院議員山中郁子氏訪問(梶谷・塚本・和田)